

蝶媒死

死媒蝶 しはいらちよう

定価 八八〇円

第1刷発行 昭和53年9月27日

著者 森村誠一

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話東京(03)945-1111 (大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

© SEIICHI MORIMURA 1978 Printed in Japan

目次

| | |
|----------|-----|
| 出稼ぎ隠れん坊 | 5 |
| 消失した墜落 | 17 |
| 指名された出会い | 43 |
| すれちがった情死 | 86 |
| 共同打算戦線 | 102 |
| 最後の晩餐所 | 123 |
| 地獄の晩餐会 | 183 |
| 立棺の死者 | 218 |
| 死の共稼ぎ | 240 |
| 失墜したとどめ | 268 |
| 死媒蝶 | 277 |

装画 滝野晴夫
装丁 井上正篤

死^し

媒^{ばい}

蝶^{ちよう}

出稼ぎ隠れん坊

1

「さあ、今度はお父^どが鬼だ。坊^{ぼん}、早く隠れろ」

父に言われて子供は隠れ場所を物色しはじめた。あちらのものかげ、こちらの片隅、いずれも満足な場所ではない。

「もういいかい」

「まあだだよ」

「もういいかい」

「まあだだよ」

子供の声がいよいよ遠ざかっていく。

「あなた。いまよ。いまのうちに行って」

妻が、別間に隠しておいた荷物を取り出した。

「どこへ隠れたんだ？」

「きつと奥の納戸のあたりよ」

「おれがいなくなつたのを知つたら、後で泣くだらうなあ」

「しかたがないわよ。さあ早く出かけて。せつかく隠れている間に」

妻に急かされて、男は靴を履いた。荷物を手にして戸口に立つと、

「それじゃあ留守の間のこと頼むよ。おふくろも体に気をつけて」

「おまえも気をつけろや」

「暮れには帰つて来られるわね」

「うん、土産をたくさんもつて帰つて来るよ」

男は、振り分けにしたスーツケースを肩に揺すり上げると、おもいきつて、戸口から、外へ出た。そのとき遠方からうながすように「もういいよ」という幼い声が届いた。

男の足は、一瞬ためらつたが、わが子の声から耳を背けるように首を振って歩きだした。

男は、子供に別れを告げるのが辛く、隠れん坊をしている間に出稼ぎに行かなければならない身を悲しくおもつた。しかし出稼ぎをしなければ、機械化された農業経営と、都会とほとんど変りないままで向上した農家の消費生活を維持していけない。

このあたりは日本でも有数の出稼ぎ地帯だが、以前の下層貧農層の口べらし的な出稼ぎとは、メカ

ニズムが變つてきている。零細農業者のお家芸であった出稼ぎも、昭和三十年代後半から二ヘクター以上の中農にも波及した。いまや農家の経営規模にかかわらず、都市化の洗礼をうけた農家の生活様式を維持するために、出稼ぎは絶対必要不可欠になっていった。

しかも農作業の機械化は、作業期間を短縮させ、出稼ぎを長期化させている。零細農家を中心に六ヶ月以上の長期出稼ぎが増加の一途をたどり、農閑期を利用した季節的出稼ぎが通年出稼ぎに定着しつつある。従来は、農業収入に対する補助的役割だった出稼ぎ収入が、その位置を逆転してしまつた。

妻に年の暮れには帰ると言ったが、男は、おそらく来年の四月ごろまで帰れないことを知っている。妻もよく承知しながら、せめて年末までの別れと無理にでも自分の心を納得させないことには、家族が別れて暮らすあまりの長さの重圧に押されて、耐えられなくなってしまうのである。

「今度帰つて来るときには、子供が顔を忘れているだろう」

男は、バス停への道を急ぎながらつぶやいた。妻も老母も、父の姿を探してむずかるであろう子供をなんとかなだめるために送つて来ない。

妻は昨夜、体内から避妊具を抜去した。それが男が帰つて来るまでの、貞操帯になる。なんとも哀しい貞操帯であった。

2

「まあ、お姉さん！」と言つたなり、白神左紀子は、久しぶりに会う姉の真佐子の痛々しいばかりの寔れぶりに、しばらく絶句してしまつた。

県都の、ある地方銀行に勤めていたころの姉は、美人の産地の多いこの地方でも人目を惹く美貌で、その銀行の「ミス」に選ばれた。この地方の女性独特の色白の愛くるしい顔に若さと明るさがあるふれていた。

それが結婚してまだ何年もしないうちに、顔から艶が失われ、切れ長のキリッとしていた目が放散している。表情だけでなく全身に疲労が貼りついていて、二日つづけて同じものを着なかつたベストドレッサーの姉が、終戦後の復員者のようなみなりをしている。

姉は、数年前、勤め先のグループとハイキングに行った。その行先の山村でいまの夫、大槻敏明に出会ったのである。大槻は、年々過疎化の一端をたどる郷里の村の再生に情熱を燃やしていた。

貧寒な土地にしがみついて、一年の大半を苛酷な作業に励んでも報われることの少ない農業に見切りをつけ、若者たちがどんどん郷里を捨てていくのに対して、大槻は、農作業の徹底的な集約化、協業化による農村の近代化を呼びかけていた。

大槻の村は一ヘクタール未満の零細農家が多く、収益が乏しいので兼業収入を求めて休耕する者が多い。これが未利用地を開田し、一戸あたりの耕地を拡大すれば、休耕率は少なくなる。農業のあるべき姿は、大規模機械化営農以外にないという信念の下に、理想的な新しい村づくりに夢を託していたのである。

高度経済成長政策の怒濤のような圧力に抗して、必死に農村を守り立てようとしている大槻の姿は、姉のハートを激しくとらえた。町へ出ればいくらでも手軽に生きていく方が得られるのに、父祖の地に留まって大型近代農業の花を開こうとしている若い農夫の姿に、安手の文化的生活に去勢されてしまったような都会の若者ばかりを見ていた真佐子は、魂が震えるような共感をおぼえたのだ。

大槻の村の自然が豊かで美しかったことも彼女の共感に拍車をかけた。この美しい自然の中で、愛する人と新しい村づくりに励めたなら、どんなに幸せな人生だろう——と彼女は自分の描いた薔薇色のビジョンに酔った。そしてその陶醉のまま、親の反対を押しきって、大槻と結婚したのである。

だが真佐子のビジョンは速やかに消えた。大槻の呼びかけに応えて村に残る若者も当初は何人かいた。だが、彼らには真佐子のように共鳴して、生活を共にしようとする若い異性は現われなかった。どんな壮大なビジョンや崇高な理念をもっていても、若者にとって、配偶者が得られないということは致命的であった。

数少ない同志は、晩年に聞く知己の訃報のようにあいついで、脱落していった。これに追い打ちをかけたのが、米の生産過剰による減反政策である。もともと大槻の村は、大型機械による協業化には、経営規模が中途半端であった。未利用地の開拓にも限界がある。

皮肉なことに機械化営農の旗印の下に買い入れた耕耘機、動力噴霧機、稲刈機、動力脱穀機、乾燥機などの月賦返済金が、農業収入だけでは賄えなくなった。

「村から出るな、出稼ぎに行ったら、百姓の負けだ」と最後まで出稼ぎを拒んでいた大槻も、月賦の重圧について抗しきれなくなった。大槻の出稼ぎは、彼の新しい村づくりのビジョンが全面降伏の白旗を掲げたことを意味していた。

このころ太一が生まれた。だが大槻は、まだ全面降伏をしたとはおもっていないなかったらしい。出稼ぎで多少の現金収入を得ると、村へ帰って来て、また農事に励んだ。

しかし、彼の出稼ぎ期間は長期化しつつあった。それが彼の追いつめられている証拠であった。折から東京、大阪の大商社や不動産業者が大規模な土地買収をはじめた。べつにこのあたりにハイ

ウェーが入るといふ噂は聞いていないが、観光的な見地からの将来性を見越して、先行投資をしているのであろう。とにかくいまの日本ではどんな土地でも買っておけば、まちがいない。

大手資本は、まず町や村当局の頬を札束で叩き、町村ぐるみ方式で一括して買い占めていく。札束の魅力の前に、農民たちは先祖の血と汗の沁みついた土地を手放して郷里を捨てて行った。

大槻は、度重なる勧誘にもかかわらず土地を離さなかった。農民が土地を離すことは、兵士が武装解除するようなものだと言った。武器さえ手放さなければ、いつかは反撃できる機会があると考へていた。だがその武器はすでに錆びついて役に立たなくなっていたのだ。

大槻の長期出稼ぎ中、彼の老母と乳のみ子をかかえた真佐子だけでは、従来の耕地を維持できなくなっていた。

ビジョンの喪失は、速やかに恋の陶醉を醒まし、苛酷な現実^{いんやう}に否応もなく直面させた。真佐子は急速に老け込んでいった。

「お姉さん、いったいどうしたのよ」

突然の姉の訪れとその変貌ぶりに左紀子はまだよく対応できない。

「ごめんなさいね、突然こんな所へ呼び出して。お父さん、お母さん元気？」

「あら、まだ家の方へは行ってなかったの？」

左紀子は、姉がてっきり市内にある実家の方へ寄ってから来たものとおもっていた。つい少し前に突然勤め先に姉から電話がきて、会社の近くのこの喫茶店へ呼び出されたのである。姉の突然の訪れを訝りながらも、会社の方へ来たと言ったのだが、なるほどこの服装では、会社へ来られないだろうとおもった。

「とても顔を合わせられないわよ」

真佐子は、力なく笑った。はつきりした目鼻立ちには、寝れてはいても、かつての美貌を残している。むしろ生活の苦勞が、以前にはなかった濃い陰翳を刻んで、化粧と服装を改めれば、以前よりも美しくなるかもしれない。

店内の男たちの視線も、自分より姉の方により多く注がれていることに、左紀子は軽い嫉妬すらおぼえていた。

「そんなこと、まだ言ってるの。お父さんもお母さんももうちっとも怒ってなんかいないわよ。いつもお姉さんの話ばかりなのよ。今日はタアちゃんは連れて来なかったの」

「すぐ帰るつもりだから、一人で来たの。おばあちゃんが見ていてくれるわ」

「あら、それじゃあ泊っていかないの？」

左紀子はびっくりした。日帰りできる距離ではあるが、姉が市へ出て来たのは、実に数年ぶりなのである。

「ごめんさいね。今日は左紀ちゃんに会いに来たのよ」

「私に？ いったい改まって何なのよ」

「実は大槻のことなの」

「ああ、お義兄さんのこと聞かなかったけどお元気」

「それが……」と言いかけて、真佐子は言葉を詰まらせた。左紀子は、義兄の身になにか起きたのを悟った。聞くのがなんとなく恐ろしく、黙って姉の言葉の先を待っていると、

「大槻が行方不明になっちゃったのよ」

「行方不明？ それどういうこと」

「去年の十月末に東京方面へ出稼ぎに行ったまま消息が絶えちゃったの」

「まあ」左紀子は咄嗟とつさになんと行ってよいものか、言葉がつづかない。

「年末には帰って来ると言っていたのよ」

「消息が絶えたって、出かけて行ってから、いっぺんも便りがないの？」

左紀子は、ようやく言葉を押し出した。

「去年の十二月の初めに来た手紙が最後だったわ。それまで、月に二回は必ず手紙をくれたのに」

真佐子は声がうるみかける。心細さに押しつぶされそうであった。いまは四月の半ばである。

「お姉さん、しっかりしてよ。お姉さんがそんなにメソメソしていたら、タアちゃんやお姑ちゃんおばあちゃんが可哀想だよ」

「ごめんなさい。左紀ちゃんに会ったものだから、つい気持が弛ゆるんで」

姉は慌あわてて目頭を指で押えた。

「きっとお仕事忙しくてお手紙書くひまがないのよ。それで最後の手紙はどんなことを書いてきたの？」

「都内の建設現場で働いているけど、あまり賃金がよくないので、近く仕事を变えるつもりだと書いてあったわ。仕事の都合で正月には帰れなくなるかもしれないが、辛抱してくれって」

「それじゃあ心配ないじゃないの」

「でもこれまで四カ月も音沙汰がなかったことは、まったくくないのよ。私心配で心配で」

「お姉さんのほうから手紙は出したんでしょ」

「居所になっていた山谷さんやという所の旅館に出したんだけど、宛名人居所不明で差し戻されてきたわ」
「山谷といえは、労務者の宿屋が集まっている所ね。きつと宿屋を変えたのよ」

「変えたのなら変えたって必ず言ってくるわ。あの人が、いったいどうなっちゃったのかしら」
真佐子は、いても立ってもいられないように身をよじった。

「お姉さん、これは聞きにくいことだけど、お義兄いさんに、他の女性ができたような気配はなかった？」

左紀子は、残酷かとおもったが、おもいきって聞いてみた。

「あの人に、他の女？ まさか！」

姉は、そんな可能性はおもってもいなかった様子である。

「絶対にないと言いきれないでしょう。おにいさんだってまだ十分若いし、お姉さんと何ヵ月も別れて暮らしているんだから」

「そんなお金ないはずよ」

「お金の問題じゃないわよ。男と女が出会ったら……」

左紀子は、自分のほうが姉より年上のような口をきいていた。

「そうだわ、その可能性もあったわね。でも私はとにかく、太一まで捨てて行くかしら？」

「逆上したら、わからないわよ」

「私のほうが逆上しそうだわ。左紀ちゃん、それで今日はおねがいがあったのよ」

真佐子は、少し姿勢を改めて言った。

「なんとなく他人行儀な言い方だね、お姉さんらしくもない。なにかしら？ 私にできることなら

なんでもするわ」

「少しお金を貸して欲しいの」

「いいわよ、あんまりないけど、どのくらい要るの？」

「助かったわ、とりあえず二十万ほど貸してもらえないかしら。東京へ行って働いてすぐ返すわ」

「お姉さん、東京へ行くの？」

左紀子はびっくりして質ねた。

「ええ、そのつもりよ。もう家は私が働かなければ、一家心中をしなければならぬほど追いつめられているのよ」

「でも、お姉さんまで東京へ出なくても、その気になればこの町でいくらでも勤め口は探せるでしょ」

「東京なら、働きながら、あの人を探せるわ」

「太一ちゃんはどうするのよ」

「お姑ちゃんが面倒みてくれるわ」

「お姉さんよく考えてよ。タアちゃん孤児になっちゃうのよ」

「孤児だなんて。東京へ行っていちおう生活の目処がついたら、太一とお姑ちゃんを呼ぶわよ」

「お仕事の心当たりはあるの？」

「ええ、高校時代のお友達が働いている所なの」

「どんな所？」

真佐子の表情に逡巡が揺れた。

「夜のお勤めね」

「夜の勤めといつても、そんないかがわしい場所じゃないのよ。赤坂の一流のクラブよ。お客も一流の人ばかりだそうじゃ」

「私、お姉さんにそんな所で働いてもらいたくないわ」

左紀子の^{まよた}顔を父の顔がよぎった。往年、県警の鬼刑事といわれた父が、姉の意図を聞いたら、飛び上がって怒るだろう。

「それは左紀ちゃんの見解よ。夜の勤めだって立派な仕事だわ。サービスって、機械では絶対につくれないものでしょう。それにとってもいいお給料くれるのよ。普通のお勤めの五倍から十倍ぐらいにはなるというのよ」

「だからいやなのよ。まともなお勤めでそんなにお給料くれるはずないもの。おにいさんが聞いたら絶対反対するわ」

「しないわ」

真佐子は、これまでとはちがうビシリとした口調で言った。

「反対しない？」

「しないわよ。いまの大槻家の家計は、それほど追いつめられているの。たとえあの人が無事にどこかで働いていたとしても、もう土木工事や穴掘り作業の出稼ぎでは、どうにもならないところまできているのよ。あの人、はつきり言って負けたのよ。だから逃げたのかもしれない」

「まさか」

「いえ、絶対そうじゃ、あの人自分のビジョンに敗れたんだわ。その敗北感に耐えられずに逃げだしたのよ」